

「町」の読み方調査について

2017/08/08 熊本大学日本語日本文学研究室

2017年8月5日(土)に開催された「熊本大学オープンキャンパス 2017」において、日文研究室前の廊下スペースを使って、簡易版のアンケートを行いました。

これは、「〇〇町」(例：熊本町)という地名を何と読むかについて、「〇〇マチ」「〇〇チョウ」「改めて聞かれると分からない」の3択で、九州の地図(回答者の居住地・出身地)に色別のシールを貼ってもらう、というものです(地図は別ファイルを参照)。

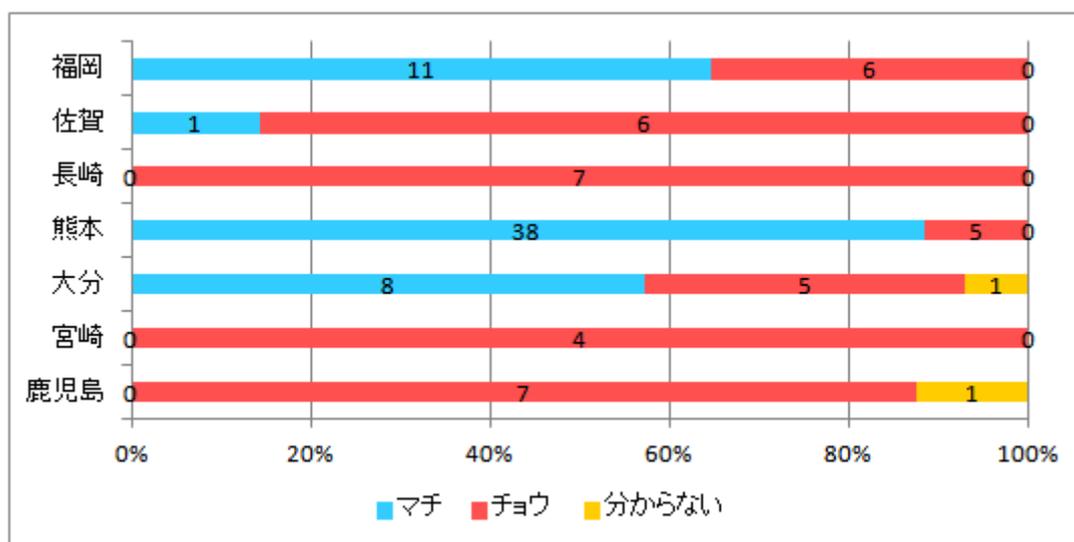
アンケートの結果、九州内100人、九州外3人の回答が得られました。回答者の多くは高校生ですが、保護者の方や通りすがりの大学生・大学教員の回答も含まれています。以下、多数の回答が得られた九州内のデータを見ます。

まず、県別の回答は、次の表のとおりです。人数に偏りがありますが、各県の方から回答が得られました。

《表1》「町」の読み方(県別・人数)

	マチ	チョウ	分からない	計
福岡	11	6	0	17
佐賀	1	6	0	7
長崎	0	7	0	7
熊本	38	5	0	43
大分	8	5	1	14
宮崎	0	4	0	4
鹿児島	0	7	1	8
計:	58	40	2	100

次に、県別にそれぞれの回答の割合を示すと、次の図のようになります。



図：「町」の読み方(県別・割合)

全体の傾向として、「〇〇町」を「〇〇マチ」と読む人が多い県と、「〇〇チョウ」と読む人が多い県に、はっきりと分かれることが分かります。

まず、訓読みで「〇〇マチ」と読む人の割合が高い県は、熊本県（38人／88.4%）が圧倒的で、次いで福岡県（11人／64.7%）、大分県（8人／57.1%）となっています。

一方、音読み「〇〇チョウ」は、長崎県（7人）と宮崎県（4人）で100%。鹿児島県（7人）で87.5%、佐賀県（6人）で85.7%でした。

さて、このような読みの傾向の差は、どこから生まれるのでしょうか。すぐに思いつくのは、「自分の町の名前を（例えば、電話で住所を伝えるときに）どちらで読んでいるか」という普段の読みの習慣の影響です。

添田（2011）は、『日本分県地図地名総覧 59』（人文社）という1983年の資料（ということは、いわゆる「平成の大合併」以前の資料です）を調査し、全国の「町／村」が音読み「チョウ／ソン」と訓読み「マチ／ムラ」のどちらで読まれるのかをまとめています。

同書の表から九州7県の「町」のデータをまとめると、次のようになります（合計欄とパーセンテージはこちらで付け加えました）。

《表2》「町」の呼び方（添田 2011:160）

	マチ		チョウ		計
福岡	65	97.0%	2	3.0%	67
佐賀	9	25.0%	27	75.0%	36
長崎	4	5.7%	66	94.3%	70
熊本	65	98.5%	1	1.5%	66
大分	30	83.3%	6	16.7%	36
宮崎	0	0%	28	100%	28
鹿児島	1	1.4%	72	98.6%	73
計:	174		202		376

先のアンケート結果の《表1》とこの《表2》は、熊本・福岡・大分の各県は訓読み「マチ」、宮崎・鹿児島・長崎・佐賀の各県は音読み「チョウ」、という傾向で一致します。

わざわざ地名を音読しないかぎり気付かれない隠れた地域差が、九州内にあるのです。

なお、「マチ」が圧倒的に優勢な熊本県でも、例えば熊本市の中心部を細かく見ていくと、「辛島町」（からしまチョウ）、「水道町」（すいどうチョウ）、「花畑町」（はなばたチョウ）のような音読み「チョウ」の地名が混在しています。

なかなか一筋縄ではいきませんが、興味のある方は、お近くの地名を気にしてみてください。

〔参考文献〕

添田建治郎（2011）『2番教室からの日本語講座—方言・地名・語源のなぞ』、ひつじ書房。

文責：茂木